

第V章 考察

第1節 鳥形埴輪について－鶴鷺形埴輪の形態－

荷鞍坂1号墳（以下本古墳）からは、円筒（円筒・朝顔形）埴輪、形象（馬形・人物・鳥形）埴輪が出土した。形象埴輪のうち鳥形埴輪は2体確認できるが、種類はいずれも鶴鷺形である。鶴鷺形埴輪の出土例は全国的に少なく、現時点では本古墳を含めても5遺跡10例であり、そのうち嘴から尾までその形態がわかっているのは、和歌山県大日山35号墳例しかなかった。関東においては、本古墳の調査で初めて鶴鷺形埴輪の全身の形態がわかったので報告したい。

鶴鷺形埴輪の形態

まず、鶴鷺形埴輪とはどのようなものか簡単に紹介する。鳥形埴輪には、鶴鷺形のほかに鶏形、雁鴨形、鶉形がある（賀来2002）¹⁾。そのうち雁鴨形・鶉形・鶴鷺形埴輪はいずれも水辺に生活域をもつ種類の鳥を写して、今まで「水鳥形埴輪」と総称して扱われてきた。近年、出土例の増加とともに水鳥のなかでも数種類の鳥の形態を写していることや、鳥の種類ごとに出現時期や配置場所が違っていることがわかってきたため、水鳥形埴輪として一括りにするのではなく、鳥の種類別に扱うのが適当と考えられるようになった（賀来2003, 2004）。雁鴨形はハクチョウを含むガンやカモの仲間を、鶉形はウミウ、カワウなどの仲間を、鶴鷺形はツル、サギ、コウノトリ²⁾など長嘴・長頸・長脚の鳥の仲間をそれぞれ写している。

鶴鷺形埴輪は、元となる鳥の特徴を写し長嘴・長頸である。もうひとつの特徴である長脚については、鳥の脚は細く埴輪に表現するのは難しいためか、脚そのものを表現する例は今のところない。ただし、円筒基部を他の種類の鳥形埴輪よりも細く高くつくる傾向があるのは、長脚を意識したようにもみえる。形態は、細長い嘴からほとんどふくらみをもたない頭、そのまま長い頸につながり、細身の胴に下がり気味の腰から尾につながるものが多く、脚こそ表現されないが実際の鳥の形態的特徴をよく捉えている。

荷鞍坂1号墳資料の観察

本古墳からは2体の鶴鷺形埴輪が出土している。2体の形状はほとんど同じといってよいが、大きさは片方が大きく、もう一方がやや小さい。円筒基部を除いて復元が可能である。

特筆すべきは尾が接合したことである。関東では今までに3遺跡5例の鶴鷺形埴輪が出土しているが、そのうち胴体部分がわかっているものは竜角寺101号墳例と杉崎コロニー86号墳例で、いずれも胴部がすばまって先が細い筒状になって終わっている。そのため、その細い筒状の胴部先端が尾そのものではないかと考えられてきた。ところがよく似た形状の本古墳例では、すばまった筒の部分に別造りにした板状の尾を差し込む状況で接合した。尾の向きは地面と垂直方向であり、これをタテ尾と呼ぶ³⁾。本古墳例によって関東で見つかっている鶴鷺形埴輪の形態的特徴が嘴から尾の先まで初めて明らかにになり、今まで知られていた関東の鶴鷺形埴輪の形状は尾が欠落した姿であって、本来差し込み式の尾が接合していることがわかったのである。

ひつつは(第22図-52, 第54図-1)やや小さめで、先端を欠失するもののへら描きで上下に分けた細長い嘴から頭、そのまま頸へと続き背中はやや水平に近くなるものの腰に向かって下がり、細い短冊形のタテ尾が接合する。ただし尾は途中で折損している。胴部先端は細くすぼめて、尾の受けになるよう円く整えている。尾は棒状の突起をもち、胴部に差し込んでいる。顔には目と耳孔を刺突で表す。翼の下端部より下は欠失している。翼は薄く粘土を貼り付けるが羽毛の表現はない。残存高は36.0 cm。

もう一体(第21図-51, 第54図-2)は嘴を欠損するものの細長い頸、薄く粘土の翼を貼りつけた胴からなだらかに下がる腰へと続き、直接の接点はないが変形菱形のタテ尾をもつ。尾は背中に連なって自然に下がっている。顔には目と耳孔を刺突で表す。尾の下方には透孔があるが、その上端で欠損している。翼は薄く粘土を貼り付けるが羽毛の表現はない。残存高は40.0 cm。

出土状況は、2体とも周溝の中から破片が散らばった状態で見つかった。本古墳の周溝は墳丘の南西部で土橋状に現状で上幅11 mほど切れており、形象埴輪は周溝の切れ間から墳丘をみて左側の周溝内に墳丘から転落した状態で見つкаっている。墳丘の平坦面に周溝の切れ間を先頭に、武人、男子、鶴鷺形、女子、馬形埴輪の順で列をなしていたと考えられる(第8図)。鳥2体の破片は近接して混在していたため1列か、並列かといった配置状況は不明である。時期は6世紀中頃と考えられる。

鶴鷺形埴輪の類例

今までに4遺跡8例が知られている。

(1) 大日山35号墳(和歌山県和歌山市 藤井2005, 丹野2008) 岩橋千塚古墳群内にある墳長86 m, 3段築成の前方後円墳。埋葬施設は横穴式石室。墳丘2段目に作られた東西2か所の造り出しから多種多数の埴輪が出土した。

鶴鷺形は東造出しから3体見つかっている。一つは長い嘴が完存する頭部で、細長い嘴の上下をへら描きで分けている。二つめは嘴の先端を欠いた頸の途中まで残る頭部である。残る1体は嘴を欠損するものの全体を復元できたもので、薄い粘土板を胴の両脇に貼りつけて翼を表し、背中からそのまま下がる角度で長めのヨコ尾⁴⁾を造る。脚の表現はないが、円筒基部は3条4段で脚高につくられている印象である。

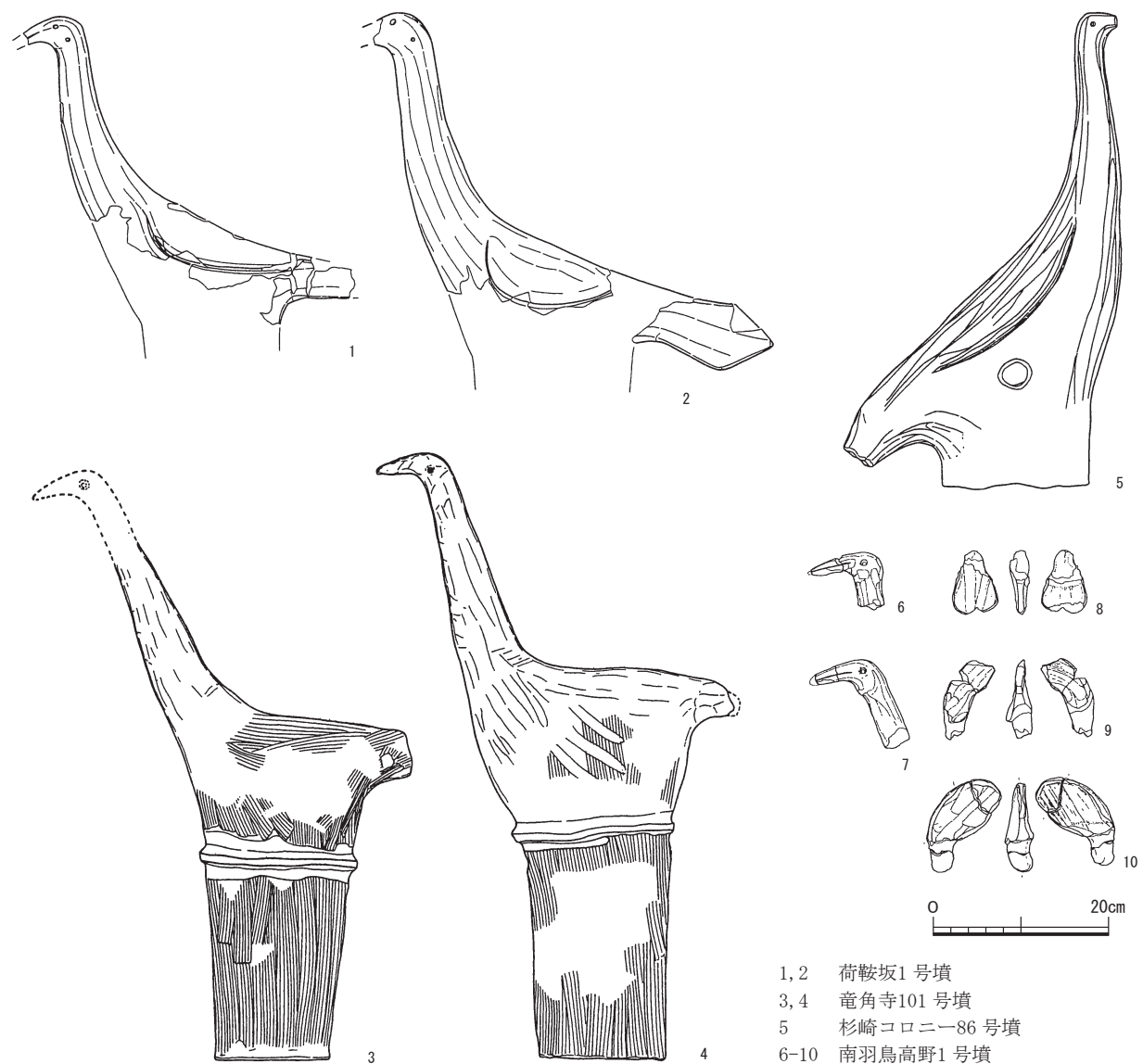
どちらの造出しも蓋形埴輪を組み合わせた円筒・朝顔形円筒埴輪で囲まれ、東造出しからは、人物埴輪(盛装男子1, 力士1), 動物埴輪(馬・猪・犬・牛形各1か, 飛鳥形⁵⁾2か, 鶴鷺形3), 家形埴輪(棟持柱建物ほか3)が出土している。鶴鷺形埴輪はほぼ同じ場所で見つかったので、3体が近接して配置されたようである。西造出しからは、鶴鷺形埴輪は出ていないが、人物埴輪(男子2, 両面人物1, 武人1, 女子1, 馬子1), 動物埴輪(馬2, 飛鳥形1か), 器財埴輪(胡篋2, 鞆1か), 家形埴輪(切妻建物ほか2か)が出土した。時期は6世紀前半である。

(2) 竜角寺101号墳(千葉県成田市 房総風土記の丘編1988) 竜角寺古墳群内にある2重周溝をもつ直径30 mの円墳。4つの埋葬施設がある。外側の周溝は墳丘の東側で一部切れており土橋状になる。また土橋部分は内側の周溝に少し張り出している。墳丘中段に円筒埴輪列が巡り、形象埴輪は周溝の掘り残し部分から南に向かって中堤に並んでいた。

鶴鷺形埴輪は2体出土している。ほぼ全体が復元できた1体(第54図-3)と、頸の途中から上を欠失して頭のない1体(第54図-4)である。両者は全体的に似た造りだが、前者の方がややふっくらと

していて体格がよい。細い嘴からふくらみをもたずに頭、細長い頸に続き、やや水平な背中から少し下がって胴部はすばまり細い筒となって終わっている。胴部をすばめて粘土を筒状に1・2段輪積にして筒状に延ばした状態であるが、そこがおそらく差し込まれた尾の抜け落ちた胴部側の受けであろう。尾のはずれた胴部の受け部分がまるで、細い筒尾⁶⁾の端部のように見えていたのであるが、本古墳例を参考にすれば、本来ならここに別造りの尾が差し込まれていたはずである。体部と円筒基部の間には1条の突帯があり、円筒部は細く高めである。突帯の直下には鳥の正面と背面とに透孔が空く。顔には目を刺突で表す。高さは68.8cm。後者は細身で大きさも小ぶりである。頭はないもののつくりはよく似ていて鶴鷺形埴輪と考えると間違いない。頸から背中、胴が細くすばまるのも同様で、やはり本来は尾が差し込まれていたであろう。体と円筒基部の境に突帯があり、その直下に前後方向の透孔がある。残存高59.0cm。時期は6世紀前半から中頃である。

2体の鶴鷺形埴輪は、外側周溝の内寄りにほかの形象埴輪とともに破片で出土した。中堤に列状に配置した形象埴輪が、外側周溝に転落した状況を示していて、周溝の掘り残し周辺に家形・馬形・人物(女



第54図 鶴鷺形埴輪集成図

子)を置き、続く中堤には、人物(武人)、猪形、鶴鷺形、犬形・鹿形の順で並んでいたと復元されている。

(3) 南羽鳥高野 1 号墳(千葉県成田市 宇田 1996) 2 重周溝をもつ墳長 44 m の前方後円墳。墳丘はすべて削平されており埋葬施設は不明である。内側周溝の墳丘寄りに大量の円筒埴輪が、外側周溝北西部の中堤寄りからは形象埴輪が見つかった。墳丘西側の後円部からくびれ部、前方部にかけての中堤に形象埴輪が列状に並んでいたと考えられる。未調査の外側周溝南西部にも形象埴輪列が続いていると推定されている。

鶴鷺形埴輪は2体(第54図-6,7)出土している。いずれも頭部から頸部の途中までの破片である。細長い嘴の上下をへら描きで分け、ふくらみをもたない頭部、細い頸へと続いている。顔には目を刺突で表す。

出土状況はくびれ部からやや前方部寄りの外濠でほかの形象埴輪とともに見つかった。形象埴輪はくびれ部後円部側から人物(男子・女子)、馬形、武人、家形、鶴鷺形、種類不明鳥形埴輪の順番で列状に並んでいたが、列の先頭が後円部側か前方部側かは不明である。時期は6世紀前半である。

(4) 杉崎コロニー 86 号墳(茨城県水戸市 井ほか 1980) 墳長 30 m の帆立貝式前方後円墳である。後円部墳丘中段前方部側に木棺直葬の埋葬施設が見つかった。円筒埴輪は墳頂と後円部中段に並んでいた可能性が高い。形象埴輪はほとんどが前方部前端から転落した状態で見つかった。

鶴鷺形埴輪は1体(第54図-5)で、嘴の先端と基部を欠失している。嘴からふくらみのない頭部、細い頸へと続き、そのままならかに背中が下がり、胴を細く筒状にすばめたうえ、さらに先端へと粘土を2段ほど輪積みして延ばしている。報告によれば「尾はやや垂れ気味で 中略 偏円形の孔となっている」(井ほか 1980 p.26)のであって、細い筒状の胴部先端を尾と判断している。鳥形埴輪の尾になりそうな破片がないことや、別造りで差し込み式の尾の例が今までなかったために尾の存在が予想できず、尾の受け部になっている輪積み粘土紐端部の処理を尾の先端であると考えたのであろう。本古墳例を参考にすれば、この埴輪も本来なら別造りの尾が差し込まれていたはずである。体の左右に薄く孤状に粘土を貼って翼を表し、その下方に透孔を空ける。円筒基部がないため、突帯の有無や高さなどは不明である。残存高 53.0 cm。

出土状況は、前方部前端付近から多くの形象埴輪とともに見つかった。鶴鷺形埴輪の破片は前方部南寄りからの出土で、ほかの形象(人物(女子・男子)・馬形)埴輪を含め配置場所は特定できていないが、前方部前端に沿って形象埴輪を集中的に配置していたと考えられる。時期は6世紀中頃である。

南羽鳥高野 1 号墳例の尾の推定

類例にあげたように、竜角寺 101 号墳の2例と杉崎コロニー 86 号墳にも本古墳例から考えて別造りの尾羽が接合する可能性が高くなった。南羽鳥高野 1 号墳の2例については、体部がないものの鳥形埴輪の尾と推定されている破片数点があるので、本古墳例を手がかりに尾羽の特定ができそうである。

南羽鳥高野 1 号墳からは2体の鶴鷺形以外に鶏形1体と種類不明鳥形2体、合わせて5体の鳥形埴輪が見つかった。すべて頭部のみの破片で、どのような体部であったのかは不明である。報告によれば、鳥形埴輪の尾羽と想定できる破片が数点あるが「接合関係がない以上、明確な分類は不可能」とある(宇田 1996 p68)。

本古墳例を参考にすれば先にあげた2古墳例同様、南羽鳥高野 1 号墳例の尾も差し込み式のタテ尾で

ある可能性が高い。報告には鳥形埴輪の尾の可能性のあるもののうち差し込み式が3点ある。1点目はヨコ尾(第54図-8)で、2,3点目はタテ尾(第54図-9,10)であり、後者が鶴鷺形埴輪の尾の候補にあがる。2点のタテ尾の破片には大小があり、縦長の形状や差し込んだ際の尾の下がる感じなどは本古墳例によく似ている。鶏形埴輪もタテ尾をもつことがあるが、その場合、体から斜め後方に高く上がる角度で接合するのが普通である。南羽鳥高野1号墳例のタテ尾の破片は胴から下がるように接合するので、鶏形のものとは考えにくい。

2点の尾の破片の大小が頭部の大小に対応すると考えれば、胴部を欠失した南羽鳥高野例の鶴鷺形埴輪の尾は第54図-9,10であると考えてよいだろう。

鶴鷺形埴輪の特徴

鶴鷺形埴輪の形態的特徴は、本古墳・類例を含めてよく似ており、実際の鳥の特徴をうまく写し取っていることがわかった。和歌山県の大日山35号墳例は扁平なヨコ尾をもつことがわかっていたが、本古墳例から類推すると、関東地方(千葉県・茨城県)出土の4遺跡7例では、尾が差し込み式のタテ尾である可能性が高い。

5遺跡10例のほとんどが6世紀前半から中頃の時期に集中しており、今後さらに時期幅が広がる可能性はあるが、現時点では6世紀前半が初現であり、鳥形埴輪の中ではもっとも後出の種類である。分布は現時点では和歌山県、千葉県、茨城県である。

鶴鷺形埴輪は、杉崎コロニー86号墳例をのぞき、複数で出土している。1体しか見つかっていない場合でも本来は複数体並んでいた可能性はある。配置状況は、ほかの形象埴輪とともに群、もしくは列を形成している。

本古墳から出土した2体の鳥形埴輪は、例の少ない鶴鷺形埴輪であった。本古墳の鶴鷺形埴輪2体が、嘴から尾までほとんど復元できたことによって、今までは存在すら想定されていなかった竜角寺101号墳・杉崎コロニー86号墳例も別づくり差し込み式の尾をもっていた蓋然性が高くなり、尾の形態も予想できるようになった。また、頭部と尾の破片しかなかった南羽鳥高野1号墳例についても本古墳例を参考に鶴鷺形埴輪の尾を推定することができた。

鶴鷺形は鳥形埴輪の中でもっとも後出の種類で、古墳時代後期前半(前方後円墳編年(広瀬1992)9期)に登場し、今のところその時期に集中している。分布は3県だが、関西でも関東でもみつかったことから、ほかの種類の埴輪と同様、特定の分布を示す埴輪ではなく、現時点で出土例のない空白地域にも今後見つかる可能性が高い。本古墳例が加わったことで、既出の鶴鷺形埴輪、また今後の出土資料について形態的予見ができるようになったといえよう。(賀来)

註1) そのほかに鷹形が知られているが、単体の埴輪の例がなく、人の腕に載っているため人物埴輪の一部として扱い、ここには含めない(賀来2004)。

2) 実際の鳥の名前はカタカナで表し、造形や絵画の鳥は漢字で表す。たとえば、朝を告げるニワトリ、鶏形埴輪と表記する。

3) 鳥形埴輪の胴を尻部のところで閉じ、垂直方向の尾をつけたものをタテ尾と呼ぶ(賀来2002)。

4) 鳥形埴輪の胴を尻部のところで閉じ、水平方向の尾をつけたものをヨコ尾と呼ぶ(賀来2002)。

5) 翼をひろげた飛翔形の鳥形埴輪である。大日山35号墳で初めて出土し、他に例はない。鳥の種類は不明。一般的な鳥形埴輪にはない刺突が頭や翼・尾の端面などにあるなど木製品との共通性があり、鳥形木製品の埴輪転化の可能性が高い。

6) 鳥形埴輪の胴を尻部で閉じないで筒状に残したものを筒尾と呼ぶ(賀来2002)。ほとんどの場合、筒状の胴部端に湾曲する粘土板を上にかぶせて尾羽をつくりだす。